

ナノ物質

母体から胎児へ移行

科学的課題について市民の目から問題を提起「生産の科学」ではなく「安全性の科学」の観点から活動を展開している。

「ナノ粒子」の課題もその一つで、二月二十三日には都内で「市民科学講座」を開催し「ナノ粒子の健康リスク」をテーマにしたシンポジウムを開いた。

報告の中で同研究室代表の上田昌文さんは、物質がナノ化されることで持つ新

◎懸念される「ナノ隠し」遅れるデータ公開

NPO「市民科学研究室」は日常生活のあらゆる科学的課題について市民の目から問題を提起「生産の科学」ではなく「安全性の科学」の観点から活動を展開している。



消費者の信頼はまだ得られていないナノテク。安全性が課題(2月23日)

業界で進む「ナノ隠し」

たな毒性を説明しつつ、「ナノ粒子は様々な生活用品に実用化されながら、その毒性について消費者に情報提供されることは少ない。発がん性の疑いが指摘された〇八年以降、ナノ隠しの現象も見られるようになった」

現在食品から化粧品、携帯電話、エスカレーターの手すり、塗装まで幅広く使用されているナノ粒子。上田さんは、消費者は積極的に情報を求めていくことが必要、と呼びかけた。

ナノ粒子は十億分のメートルを単位とする超微細物質。上田さんによると、カーボンナノチューブ、フラーレン、酸化チタン、酸化亜鉛、ナノシルバートなど

化粧品や家電製品、医療器具、スポーツ用品、さらに食品にまで実用化が進む「ナノテクノロジー」。十億分の一メートルという超微細物質「ナノ粒子」を扱う技術だが、急ピッチで開発が進む反面、企業の安全性への対応は遅れている。二月二十三日、NPO「市民科学研究室」は「ナノ粒子の健康リスク」と題し、母体から胎児へナノ粒子が伝達され、次世代に健康影響を及ぼす毒性研究成果などについて特別シンポジウムを開催した。研究者の間では、細菌・ウイルス・プリオンに次ぐ「第四の病原物質」との指摘もあるナノ粒子。開発企業に情報開示を求める消費者の監視活動の重要性も指摘された。

「市民科学研究室」がシンポ

一千製品以上に使用、心配される健康影響

素材は幅広い。ナノ化された物質は用途ごとに様々な製品に実用化される。食品をはじめ、身の回りの製品など一千品目を越える商品に使われている。

「ナノ粒子に健康被害発生の可能性が指摘されるようになった頃から、製品メーカーからの情報提供は消極化した。環境汚染の可能性もあることからラベリングしていくことが必要」と説明した。

発がんの指摘も

◎ナノ粒子は次世代に伝達され、健康影響も
当日のシンポジウムには東京理科大学副学長・武田健策教授が「母子伝達されるナノ粒子」について報告。母親から子どもにナノ粒子が伝達され、健康影響を及ぼすことを明らかにした実験結果を報告した。これは武田さんら実験グループが担ったマウスを使った研究。酸化チタンを妊娠したマウスに皮下投与す

ると生まれてきた脳や生殖系に酸化チタンが検出されたと化学物質は、化粧け止め、化粧品の外で活用されている人は実験結果をもちいた粒子は、体には環境からできる粒子を減らすことされる、と説明した。東京理科大学助教授の武田さんは、その粒子のリスクを回避できるか、毒しつ、リスク管理を指摘した。報告の中で梅澤ナノ材料のリスク適切な「有害性評価」の確立、ナノ材料の高感度で定量的な推進、想定されるナノの区別など

説明。この実験で、ナノ粒子が妊娠中の動物の循環系に入ると胎児への作用を及ぼすことが確認されたが、梅澤さんは実際に人に発生するか、そのリスク管理の大部分は企業の責任と説明した。NPO市民科学放射線健康被害健康被害などについて活動を展開してい